

記念と展示に見る中国共産党第一回代表大会



石川 慎 浩
いし かわ よし ひろ

中国共産党が結党百周年を迎える。この号の刊行される七月一日は、ちょうど中国共産党（以下、適宜「中共」と略称）の創立記念日にあたっており、さまざまな行事が行われるであろう。もっとも、事前に発表された記念行事には、昨今の反中気運に配慮してか、軍事パレードは含まれていないので、従来の方を見てきた者にとっては、かなり抑え気味の祝賀体制だという印象を受けるかも知れない。

さて、党の創立を祝うという考えが中共に生じたのは、一九三〇年代の後半になってからである。第一回の党大会を党の起点とすれば、その十五周年となる一

九三六年に、はるかモスクワで最初の創立記念行事が挙行されている。外国で行われたのは、当時の中共中央がいわゆる「長征」の末、ようやく陝西省北部にたどり着いたばかりで、党結成を振り返って祝うような余裕がなかったからである。モスクワでの行事の音頭をとったのは、中共がモスクワのコミンテルン本部に置いていた代表団で、たまたま現地に第一回党大会（一大）に出席した党員もいたため、かれが挨拶に立ったり、コミンテルンの機関誌を中共結党記念特別号にして関連する文章を載せたりしている。

中国国内で党が祝賀活動をするようになるのはその

定で開館した。なぜ関係者限定だったのか。栄えあるこの党大会に参集した党員たちがその後にとどった歩みが極めて錯綜していたからである。下図は十三人の参加者の生没年と経歴を一覧表にしたものである。

十三人がその後にとどった後半生は、実にさまざまだった。便宜的に上下二つのグループに分けて間に点線を引いてみた。この線より上の六人は党員たることを終生貫いた者だが、建国時に天安門楼上で開国式典を見届けることのできた者、すなわち党の指導者として建国の日を迎えられたのは、毛と董の二人にすぎない。一方、点線より下は何らかの事情で途中で党を離れた者だが、中には日中戦争時にいわゆる傀儡政権に加わった「対日協力者」、中国語でいう「漢奸」になった者もいる（陳公博、周仏海）。展示をするところうした複雑な経歴の持ち主の名前を出さねばならず、その影響を考えると広く公開というわけにはいかなかったのだ。また、限定展示であっても、陳列室に顔写真を掲げることが許されたのは、終生党員組の六人のみで、毛沢東の写真だけが特大だった。

党の歴史に坎する研究も大混乱に見舞われた文化大革命の時期（一九六六～一九七六）、陳列室は閉鎖され、その後一九七七年に十年ぶりに再開館した。そして八〇年、大会代表ではないが、党結成の事実上の

中国共産党第1回大会（一大）出席者のその後

1949 年

毛沢東 (1893-1976)	共和国主席	病死
董必武 (1886-1975)	共和国副主席	病死
何叔衡 (1876-1935)		戦死
陳潭秋 (1896-1943)		獄死
王尽美 (1898-1925)		病死
鄧恩銘 (1901-1931)		刑死

李 達 (1890-1966)	1923 離党	再入党——迫害死
李漢俊 (1890-1927)	1923 離党	殺害
張国燾 (1897-1979)	1938 離党	カナダで病死
劉仁静 (1902-1987)	1929 離党	事故死
包惠僧 (1894-1979)	1927 離党	病死
陳公博 (1890-1946)	1923 離党	刑死
周仏海 (1897-1948)	1924 離党	獄死

二年後のことで、抗日戦争のさなかの一九三八年七月一日を党創立の「記念日」として、毛沢東ら中共中央が、一週間後に予定されていた抗日戦争発生一周年の記念行事とひとつながりにして、提灯行列などを行っている。記念行事を行う上でかれらが頭を悩ませたのは日付だった。先のモスクワでの行事でもそうだったが、党の「一大」に坎する記録が当時はなかったため、行事の日取り（つまり結党記念日）は便宜的に決められたものだった。すなわち、中国国内で言えば、当時の中共中央の指導者で「一大」の出席者でもあった毛沢東と董必武の二人が、七月あたりだったことは覚えていても、日までは特定できなかったため、とりあえず月初めの一日を創立記念日に設定したのである。そののち、一九五〇年代末に「一大」の模様を伝えるロシア語の記録が発見され、史実としての第一回大会は七月二十三日に開催されたということが明らかになった。ただし行事は長らく「七一」に行ってきたおり、今さら変えるのも適当でないということで、記念日はそのままとされ、今日に到っているのである。

現在、党の創立がどのように記念・顕彰されているかを知るのに最も手取り早いのは、上海にある第一回会場跡（中共「一大」会址記念館）を訪れることである。「新天地」と呼ばれる旧フランス租界の洒落た

街区にあるこの記念館は、復元された会場と多くの関連資料を並べた展示室からなる。第一回大会には、中国各地からの代表十三名とコミンテルンから派遣されてきた二名の外国人の計十五人が出席しており、展示室にはかれらの写真パネルが並んでいる。党「一大」はそれ自体がさまざまな謎に包まれていて、これまでわたしを含め、多くの歴史家が考証に力を注いできたが、その記念館の展示の変遷もまた同様に興味深い。「一大」の考証自体は一九二一年だけの問題だが、展示の変遷からは一九四九年の人民共和国内以降の党の歩みが見えてくるのである。

この第一回大会の建物が確認されたのは、人民共和国内から二年がたった一九五一年のことだった。翌年建物は買い上げられ、補修・復元、そして党の創建史に関する展示室を併設して、一九五八年に関係者限



上海の中共「一大」会址記念館



蠟人形の再現コーナー（2001-2016）
×がニコリスキー、中央は毛沢東



白銅塑像の再現コーナー（2016-2020）

キーはコミンテルン代表として「一大」に出席しているから、蠟人形コーナーにいるのはもっともなのだが、当時は参会者のうち、かれの写真だけが確認されておらず、「一大」を研究する者たちはそれを探していたからである。そこでわたしは案内してくれた記念館の関係者に、ニコリスキーの蠟人形はどうやってこしらえたのか、尋ねてみた。

その人は苦笑いして曰く、「結党を描いたテレビドラマで、ニコリスキーを演じた外国人俳優さんをモデルにして作ってもらったんです」と。本末転倒と

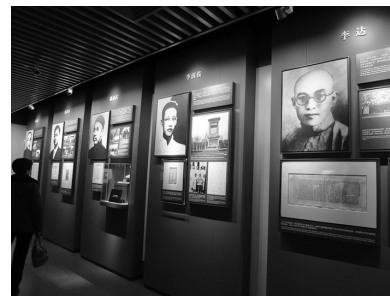
（京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター教授、京大・文博・文・昭63）

目下、記念館は百周年のリニューアル・オープンに向けて大改装中で、再現コーナーも全面的に作りかえられるらしいが、どんなものになるかは直前まで秘密だという。この号が出るころには判明しているだろうが、それを通じて中共が今後どのように歴史に向き合おうとしているか、すかし見えるかも知れないと期待している。

はまさにこのこと、仰天したが、同時にわたしは、これら記念館の関係者に心から同情した。宣伝効果の見地からリアルな展示にしてみたいという党や人民の声に応えることはかれらの責務であり、そのためにはここまでせざるを得ないのか、と。さいわい、ニコリスキーの写真は、その後二〇〇七年に発見された。それを受けて、直ちに蠟人形が作り直されたことは言うまでもない。その後、展示室の改修に伴い、再現コーナーは二〇一六年以降、抽象的な白銅の塑像群に変わった（図右）。リアルさを追求することの限界に、館員たちが気付いたからかも知れない。ただし、来館者からは、芸術的過ぎて親しみがわかないという声も寄せられたというから、展示の仕事はなかなか難しい。

中心人物だった陳独秀の写真が展示に加えられた。陳もまた途中で離党した人物で、党史の上では長らく批判の対象だったが、改革開放期になり、結党にあたっての功績を認められ、「殿堂」入りしたのである。次に展示に変化が生じたのは一九八六年七月にリニューアルした時で、初めて十三人全員の顔写真が掲示された。中国で全員の顔写真が掲示されたのは、実にこれが最初だった。この時、記念館側は党中央の宣伝部に変更を申請、党史部門の意見に基づき、歴史上の評価によってその写真の大きさを変えると共に、「漢奸」の二人は展示ケースを別にする措置をとっている。当時はまだ、栄えある「一大」代表と民族の裏切り者を一緒にしてはできなかったのである。

展示はさらに一九九九年の改修（全員の写真サイズを同じにすると共に、離党してはいるが革命に殉じた」とみなせる李達と李漢俊を終生黨員組と同じ上段に移し、かつその二人を開催地上海の代表として上段の筆頭に配す）によって、毛沢東がほかの代表と同じ扱いとなり、さらに二〇一六年の改修で、上下配列（前掲一覧表のような配列）が横配列に改められた。ついに代表たちの配列位置と政治的評価とが無関係となったのである。展示開始以来、半世紀余りを経てようやくたどり着いた記念館の記念すべき瞬間だった。



横配列に改められた代表の紹介コーナー

上海の記念館には歴史研究のスタッフがおり、客観的な展示内容の確保に努めている。他方で党史にかかわる展示は、同時に社会に向けた宣伝、教育という政治的任務を果たさなければならず、その両立は時にかれらを苦しめる。第一回大会の様子を伝える資料はほとんどを求められるからである。数年前まで展示室にあった蠟人形コーナーのエピソードを紹介しよう。

記念館には、「一大」の模様を再現した一角があり、二〇〇一〜二〇一六年の十五年間は、精巧な蠟人形だった（次頁図左）。会議の模様を伝える写真などは残っていないが、十三人の中国人参加者については、全員の顔写真が残っているのだ。人形師なりに頼めば、それなりに仕上げてくれるのだ。わたしがこの蠟人形コーナーを訪れたのは、二〇〇四年のことだが、怪訝に思ったのは、十五体の蠟人形の中に、ニコリスキーがいたことである（図左の×の人物）。ニコリス